

研究者にも多様性があった方がいい



高井（山下）千加

岐阜大学工学部
[501-1193] 岐阜市柳戸1-1
助教, 博士(工学).
専門は粉体工学.
c_takai@gifu-u.ac.jp
<https://researchmap.jp/ChikaTakai-Yamashita>

https://www.instagram.com/takailab_gu/?hl=ja

日本学術振興会 (JSPS) 若手研究者交流事業に採択され、2018年1月から6カ月間、スイス連邦材料試験研究所 (Empa) に Academic guest として滞在した。当時3歳の息子との帯同を予定していたが、諸般の事情により諦めざるを得なかった。しかし、単身であったことで各国を飛び回ることができ、多くのコネクションを作ることができた。留学中に申請した文部科学省卓越研究員事業に採択され、同年11月より岐阜大学工学部の助教として着任している。

国が掲げた「すべての女性が輝く社会づくり」を実現すべく、あらゆる場で女性の活躍が期待される。追い風に見える一方で、プレッシャーに尻込みする女性も少なくないのではないかと思う。息子が生まれる前から、どうやって家事育児と仕事を“両立”されているのかと女性研究者に話を聞いて回った。話を聞くたびに私では無理だという気持ちが募り、研究者を諦めていた時期があった。そんな思いが顔に出ていたのか「Are you happy?」とメンターの Sébastien によく聞かれた。彼は私よりお茶の作法を心得、空手にヨガに紅葉栽培と趣味が多い。Marie は絵画の趣味が高じて本を出版し、Arnold は週の半分はプロの音楽家である。「研究者はこうあるべき」というのがなくて、皆やりたいことは何でもトライする。留学当初は「Happy!」と即答できなかった私も、「誰かとの比較じゃない。自分が幸せかどうかだ」と気づいた。アカデミックポジションに身を置くことに何度も二の足を踏んだ私は、「若手か?」という年齢に達してからの助教となったが、人にも環境にも恵まれて幸せだ。

研究者となって三年が過ぎようとしている。息子の影響でカブトムシの飼育にハマった。彼らは5 mmほどの卵から孵化し、腐葉土を食べ、二回の脱皮を経て終齢幼虫となる。その間、吸収されなかった腐葉土は、俵状に成形された糞として排出される。篩い分けすると、糞の大きさや形が揃っていることに気が付いた。私の専門は粉体工学だ。バラツキのある腐葉土から揃った糞を作るなんて、粉(糞)の達人なんだな、と思った。終齢幼虫は冬を越すと蛹になるための部屋(蛹室)を作りだす。幼虫の見た目はほぼ雌雄差がないのに、蛹に

なった途端、雄は角が生え明確な雌雄差が発現するから不思議だ。それでふと、幼虫の糞の形には雌雄差があるんじゃないかと思った。折しもコロナ禍で夫婦の勤務先も息子の保育園も閉鎖になり、家でも研究できないか考えていたところであった。息子を巻き込んで糞を集め画像解析し、夫を巻き込んで多変量解析してもらった。ある日の朝、データを整理していたら、雌雄差がある糞の形状因子を見つけた。興奮のあまり家で小躍りし息子に白い目で見られたけれど、仮説が実証されたときの感動は何にも代えがたい。

ところで、職業が「研究者」だと答えたときの反応が、欧州と日本で大きく異なるように思う。やりたいことは何でもトライし複数のことを両立するのが当たり前の欧州に対し、一つのことに専念することを良しとする文化が根強い日本では、研究者はその最たる職業と言えるだろう。ワークライフバランスの実践が難しいと思われているために研究者は性別のみならずキャリアも含めて多様性が乏しい。私自身、二の足を踏んでいた時期があるから、「研究者」に対する“何をやっているのかよくわからない”敷居の高さはよくわかる。研究は、身近な疑問を解決する積み重ねである。「なんでだろう?」と思ったら、「こうじゃないかな」と仮説を立てて、それが実証できるまで繰り返す。苦手な分野に差しかかるなら、それが得意な誰かの力を借りればいい。どうしても今の技術では明らかにできない、という壁にぶつかったら、自分でその技術を開発すればいい。「知りたい」という心が原動力になる。その熱意はきっと、誰かの心を動かし、手を差し伸べてくれるだろう。「研究者」は決して孤独じゃない。

疑問に思う対象は人によってさまざまだが、解決に至る過程もさまざまだ。一つの方法で明らかにできなくても、研究者同士がもつ違う視点の組み合わせで解決に向かうこともある。私は苦手な分野が多い凸凹研究者だけど、研究者にも多様性があった方がいいんじゃないかな、と思う。先日息子に、「かーちゃんって先生だったの?! 学生だと思ってた。」と言われた。そんな人もいていいんだ。